

# ハルシナイから上流の地名⑦

前回は、掲載地図のトゥレプサラニア (turep-saranip オオウバユリの 鱗茎・ーを入れたー手さげ籠)の大岩 写真①は、安政四年(一八五七年)に松浦武四郎は、ニツネカムイ(nit-nekamuy 鬼神・魔神。松浦の表記はニイツイカモイ)が、落命する時に捨てたサラニア(手さげ籠)が岩と化したものと記録したことを紹介した。また、昭和六年、近江正一も『伝説の旭川及其附近』で、松浦武四郎の伝承を踏襲したことも記した。

ところが、昭和三十年に更科源蔵は、『北海道伝説集・アイヌ篇』で、砂沢クラさんの母の川村ミサシマツ姥伝として、この大岩は、ニツネカムイではなく、文化神のサマイクルカムイの忘れた籠であるという伝承を次のように書



① トウレプサラニア  
「サマイクルカムイの漁をする小舎(註一伊納)の駅の近くに岩になってい

ている。

三十五年に、知里真志保も、「上川郡アイヌ語地名解」において、伝承者は明記していないが、写真①の大岩はサマイクルの手さげ籠として、次のように地名解を書いている。  
「サマイクル・トゥレプ・タ・サラニア (samaykur-turep-ta-saranip サマイクルが・ウバユリを・掘った・手さげ籠)ーこれも岩と化して今も岸に近い河中に立っている。」

トゥレプサラニアについて、次のように書いている。  
「レイコロプイラは三ツ有。岩角を行也。」

## 四丁

トレフサラニア(註一「フ」が脱落)神霊のよし。鬼此処へムハイル(註一ウバユリ)をコダシ(註一コダス↓籠の一種)へ入捨しと云

また、松浦武四郎は幕府に提出した報文日誌の「再篙石狩日誌」では、次のように記録している。

「レイコロプイラー大岩川中に三ツ有。其の左右向い浪立より号ること也。また少し上り、四丁、此処も角岩を引く也(註一岩角を足がかりとして、丸木舟に綱をつけて引き上げる)。トレフサラ子フ」

松浦武四郎は、レイコロプイラは、川中に大岩が三個あり、それに川水が当たり浪が立つので、レイコロプイラ (re-kor-puyra 大岩三つ・持つ・激流)と名付けられたとしている。また、そこから四丁上ると、写真①のトゥレプサラニアの大岩があると記している。

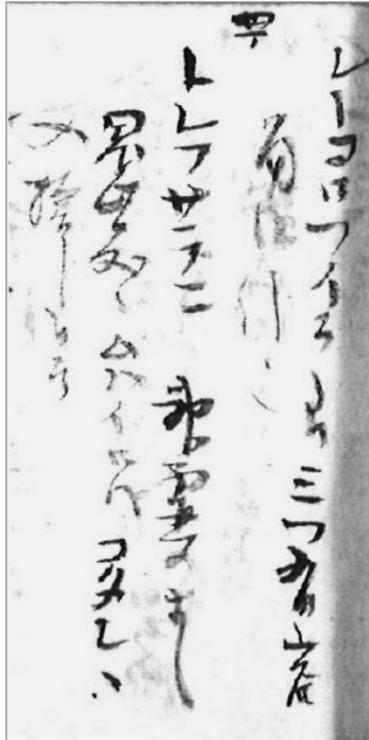
松浦武四郎のこれらの記録と、後世の記録と現況を比較検討し、次号でレイコロプイラの位置と地名解を明確にしたい。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

## 断章 旭川のアイヌ語地名研究

97

高橋 基



②『巳第二番』

川郡最初の五万分一地形図である、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』の位置の誤りもあって、その位置の比定がされていない。以下、次号にかけて、場所の特定と地名解を検討する。

松浦武四郎は、安政四年の調査に携行した写真②の野帳(ファイルドノート)の『巳第二番』では、レイコロプイラと